



今和泉正月15日小正月の田植えの物真似

近く、それ以上も、豊作予祝の習俗として引きついできた、尊い、敬虔な祈願の面影がうかがわれる。こんな心をこめたいい行事を、物真似だからと、無雑作に投げ棄てる農民の心理・習俗は、果して進歩と  
いい得るかどうか。

さいのかみは、会津全円にまだ広く残っている火祭りであるが、小正月の十五日、その宵の前夜、時には翌十六日に行なう村もある。みちの神、即ち道祖神祭で、悪病が村にはいってこないようにとの祈願で、村端れの道路ばたで行なうところが多い。御山方面に、近年、それも戦後まで、悪病神を藁人形でつくって、一緒に焼いていたのがあった。宮袋の旧道の北の入口に、道祖神が祭ってあるが、道路が改修されて、さらにその新道の側に新しい道祖神の標柱が立っている。

風俗帳に、小正月には子供が繩をひいて、通りの者から紙を貰い、その紙で藁人形を切り「さいのかみの勧進」といって、さいのかみをつくって焼いたとあるから、昔は厄落しなどの意味も含めて、男は四の行事として書上げてある。風俗帳にはなりきぜめをまじないといっ  
てこれも十五日、そうとめ、或は子供そうとめ、又なとりともいったという。家毎に踊って歩いて、餅・団子などを祝いとして貰って歩いたというのは北